



ご挨拶

水澤絳雪ひとり雑誌

雪下

第二十二号

2022/04/01 発行

題字：高橋弘美

自分の子ども時代に邂逅するという体験を、最近何度かした。実家に昔のものがいろいろとっておかれていたためである。それで忘れていた自分の断片を思い出し、つい考えこんでしまったりなどした。

忘れるというのは不思議な現象だけれども、いつも多く忘れる人は、いつも多くものごとを新鮮な目で見ることができるに違いない。わたしも記憶力が貧弱な人種だが、おかげで読み返すこと三回目というような本でもまことに新鮮である。そうやってごく少数の本と、ごく少数の情報と、くり返し出合っては忘れ、出合っては忘れする人生というものは、いまの時代古めかしくてなんだか笑われるようかもしれないけれども、自分はそんなふうでいたいようにも思ったりした。

考えてみれば、わたし自身という情報だけでもずいぶん膨大なのである。そのうえに人はなお様々なものを覚えこもうとするが、ほんとうに肝心なものは常にごく少数であるにちがいない。そしてわたしはそのごく少数のものだけでこれまでやってきたのである。現代の人間がそうなら、どんな時代だってそれでやっていけるに違いない。

今号の内容

民主政治VS専制政治
後記に代えて

民主政治VS専制政治

ついにというかやつぱりというか本式にというか、
こういう話になってしまった。アメリカのプレジデ
ントがこう云ったそうである。

わたしはいまでも深い、絶望的なまでに深い価
値観の違いというものの前に立って、なにやら戸惑
っているような気がする。始末が悪いのは、わたし
はどっちの価値観もよくわかる……というより、わ
たし自身がこの件に関してどうもどっちつかずな人
間だということを、実地に経験してきたことである。

なんの話かというところ、こういう話である。ここに、
この話を象徴するひとつのエピソードがある。

あるときロシアの主教が、百姓たちの貧しい暮ら
しに思いを致し、着飾って二頭立ての立派な馬車に
乗るのをやめて、ごく普通の荷馬車に乗って出かけ
た。すると、主教のお通りを見に出てきていた百姓
たちは怒りだした。主教が立派な馬車に乗らず、着
飾らないでは、われわれはどうなるのか、というの
である。この話を紹介しているのは、日本に正教を

伝道した聖ニコライだ。彼は日記にこの話を書きし
るし、農民たちの考えは正しい、と書いている。農
民たちが示したような感情がまだ生きていることに、
安堵するような書きぶりである。

白状すると、わたしはこの農民たちのようになり
たかった。この農民たちのように既成の組織や制度
に権威を認め、それが自分の根拠となり救いになる
と信じたかった。そのためにわたしはずいぶん骨折
ったのである。が、わたしの性質のあきれかえるほ
どの古典主義と旧式ぶりにもかかわらず、わたしは
ついにこのような感情をもてなかつた。

思想ならば、どんなに自分の本性とかけ離れたも
のであっても、いくらでももつことができる。思考
や思想はわたしを容易に欺くからだ。だが感情は！
感情がもてないということは、もう決定的にだめで
ある。感情は思考と違ってどこか肉体的なものだ。
あるひとつの感情を自分のもののように偽って感じ
ることは、少なくともわたしにはできなかった。わ
たしは地上になんらかの権威を認める……すなわち
秩序の中の人間でいることが、これまでもこれから
も、決してできないのであり、この純朴な百姓たち
が住んでいる世界に属することが絶対にできないの
である。それがわたしの属する国や文化や教育の問
題に属することなのか、わたしの性質の問題なのか、
それとも神がそれをお許しにならないのか、わたし
は知らない。

現代の先進国に生まれ、教育を受けた人間であれ
ば、この暗愚な百姓どもがなにを云っているのかわ
からない、という人のほうが圧倒的ではあるまいか
と、わたしはおそれる。ところがわたしははらわた
が痛み出すほど、この百姓がなにを云っているかわ
かる。なにを求めているかわかる。彼らには、てめ
えらの富を売ってわれわれに施せなどという気持ち
は少しもない。彼らにそのような意味の平等を求め
る気持ちは微塵もないし、そのようなことは彼らの
感情に反するのだ。むしろ、着飾った聖職者、贅を
尽くした教会の装飾、この世のものとも思われぬ荘
厳な儀式、あきれかえるほど長いテーブルの端に座
つてものを云う大統領、などが、彼らにはどうして
も必要なものである。これらのものがないなら、われ
われはいったいどうなるのか。これは心からの彼ら
の思いであって、こうした思いが、百年や二百年で
この地から消えてなくなるとは、わたしには思えな
い。

かつて共産主義を掲げて、時代遅れの専制君主ツ
アーリに搾取され貧困にあえぐ百姓どもを救おうと
立ち上がったのは、地主の子息など比較的恵まれた
層の若者たちであった。彼らはいかなる貧困にも耐
え、どのような圧政にもだまって耐えぬくロシアの
農民をほとんど神聖視していたが（この宗教的な崇
高な感情もわたしにはよくわかる）、彼らが直面し

たのは、農民の無知蒙昧な頑迷さというより、このような感情だったのだろうとわたしには思われる。ツァーリこそが君たちを苦しめているのだ、君たちの富でツァーリは私腹を肥やし、あのように桁外れに豪華な生活をしているのだ、聖なるロシアの教会はいまやツァーリの取り巻きに成り下がっており、ツァーリの専制のために教会の教えを利用しているのだ、悔しくはないか、憎くはないか、などと云われたところで、百姓たちの答えは「とんでもない！」のひとことであつたらう。

これもまた聖ニコライが日記に書き残していたことだが、ニコライがロシアで日本伝道のための費用を集めていたとき、ある貧しい農婦が、ひとときの布を両手に抱えて寄付のためにもつてきた。ニコライは偶然それを窓から見ていて、貴族や商人から受けとるまとまった金よりも、この貧しい農婦のたったひとときの布が、そしてそれを寄付しにやってくる農婦の心が、どれほど尊いかというようなことを考えている。自分自身がないもたない存在であるのに、それをさらに削つてまで教会にながしか差しださずにはいられない心、それを支える農婦の感情を考えたとき、それが長年にわたる宗教的洗脳の結果で、その結果この農婦はみずから搾取に加担するほど愚かになってしまったのだと云いきれるかどうか。

わたしは自分がこの農婦のようでないことを悲し

む。この農婦のようであるにはあまりにも賢しくなつてしまった自分をいやしく、恥ずかしいもののように思う。わたしは月にたった数千円の金でさえ、教会に払いたくないほうの人間である。わたしはもう教会に献金するのをやめた。行くのもやめてしまった。それはたぶん、わたしがあんまり賢すぎるからである。そしてわたしはそのさかしらな自分の頭が悲しいのだ。この農婦のようであるには、たしかに今日的な視点で見れば一種の無知である必要がある。そして暗愚である必要がある。だが彼女は決して愚かではない。貧しい女でさえない。彼女はすでに天国にいる。わたしにははるかに遠くなくなつた、あの至福に満ちた天の国に。

わたしは別に昔日のなにかを賛美しているのではない。わたしたちはただ変わつてしまつたと云いたいのだ。なぜ、いつの間、どうして変わったのかは、少しもわからないけれども、いつの間にかわたしたちは双方に意見を交わすことも不可能なほどに変わつてしまつたようである。ここにもうひとつ、象徴的なエピソードを挙げておく。知り合いのロシア人と話をしている、こんな話を聞いた。

彼が仕事でドイツに行ったときのことである。街を散策していると、立派な教会が目に入ったので、興味をもって近づいていった。中に入って、彼は驚いた。その教会はカフェとして使われていたのであ

る。彼は胸が痛む思いがした。大切ななにかを踏みこじられているような気がした。ひどく落ちこみ、考えこみながら、彼は教会をあとにした。

わたしにはこの人の気持ちがよくわかつたので、それはとても複雑な経験だつたでしょうと云つた。教会は神のための場所、神に捧げられた場所です、神のための場所を、人間が人間の都合でいいように使つていいとは、わたしには思えません。

彼はうなずき、でも、こういうことがわからない人が多いようだと言つた。こういう感覚のない人に、これをわからせることは不可能だ、とも。

わたしはロシアが、きょうだいである隣国へ戦争をしかけた理由を知らない。だがなぜか、この国に對して怒りを燃やす気持ちになれない。もちろん、一方的に殴りこみをかけ、武器をもたず訓練も受けていない一般市民を殺している理由などあるはずがない。でもわたしの感じているのはそういうことではない。なぜ今回のロシアの行動が、追いつめられた人間の絶望的なあがきを思わせるのか、それもわたしにはわからない。だがそこにはどうにもしようのない深い絶望があり、手の施しようのないほど深い断絶がある。

教会を神のための場所と思うか、カフェとして利用したらすてきだと思ふか。聖なるものは聖なるものであり、人間の意志による変更が許されないもの

もこの世にあるのだと思うか、すべては人間のものであり、人間がいかにようにもしてよいのだと思うか。聖なるものへのおそれを抱くか、人の理性を信じるか。神秘の前におそれかしまり、それを神秘のままにとどめようとするか、しゃにむにそのペールを剥いでしまおうとするか。あるいは自分はペールを剥ぐ権利を持っており、なんでも知る権利があると思うのか。

この深い深い断絶をどうか考えてほしい。だって、アメリカのプレジデントが民主主義と独裁主義の対立を云うとき、彼がそのように意識しているのだから知らないが、彼はこの対立を指しているのだからである。話が広がりすぎ、普遍的になりすぎていくというなら、民主主義がどこから生まれ、専制政治はなにかから生まれるのか考えてみてほしい。そこにひそんでいる人間の心性のことを考え、西洋と東洋の永遠の対立のことを考えてみてほしい。そしてわたしたちは東洋人なのである。ほんものの専制君主は東洋にしか存在したことがないと云ったのが誰だったか、いまちよつと思ひ出せないが、確かに中国では皇帝は天子なのであって、日本の天皇は神の子孫で、東ローマ帝国では、皇帝は神の国をこの世に実現させるべく国を導く王なのだ。

いまある統治者が、おれは神だ、なぜならおれはいま統治者としてこの地に君臨することを許されて

おり、おれにそうした状況が与えられているということ、神がそれを許しているということだ、と云うとする。この言葉の意味をまじめに吟味すれば、そう簡単にはかばかしいと一蹴できないことは、真摯に人間をやつていればわかるはずである。もう一方で、別の統治者はこう云うだろう。わたしは選挙で選ばれた。投票したのは国民であり、わたしに勝利をもたらしたのは数である。わたしはより多くの人に選ばれた代表ではあるが普通の人間で、選挙で勝つたので、ある期間、一定の特権や権限を付与されるというだけのことである。

この差よ！ この二者のあいだには絶望的な断絶があるのだが、しかしやつぱりお互いに思っているほど他人だとも云えないのだ。数はもちろん神ではないし、むしろその反対なのだが、数という濾し器で濾してしまえば、現象のすべてが透明化、科学化されて、神だの神秘だのいうものが少しも働かないなどと考える人があつたら、それは数字教とでもいうべきものを信仰しているというよりほかない。わたしは別に民主主義をどう云いたいわけではないが、それはひとつの歴史の帰結であり、ところ変わればまた別の歴史と別の帰結があることは、どうしても考慮に入れねばならぬことのように思う。

正教の教会へ足を運んでもらえばわかるが、そこにはなんともいえない古くささと懐かしさが漂

っている。正教の典礼や聖職者の衣装には、東ローマ帝国の宮中行事や皇帝のまとう衣装がまだ現役で生き残っている。カトリックの典礼が時に応じて姿を変えてきたのに対して、正教の典礼はかたくなに本質を変えようとせず、ふだんの日曜の典礼も二時間を要するし、ものによつて三時間、復活祭となると夜中から夜明けまでかかる。現代の事情を考慮して短縮するとか、日中にやるとかいう発想は、この教会にはない。

わたしはときどき、いまにも教会のあの入り口から、東ローマ帝国皇帝がものものしく入ってくるのではないかと思ひ、そのさまを想像する。コンスタンティノーブルの皇帝はもう地上にいないが、どうもそのへんにいるような気がするのだ。そんな気のある教会というものを想像してみたい。そこでは時が止まっている。そこでは皇帝は時の終わりで皇帝なのであり、典礼は永久不変の完全な形式を備えている。もちろん、いまの典礼が、そのままコンスタンティノーブルの皇帝の前で行われていた典礼だとは、さすがにわたしも思っていない。でも、そこにはそれを思わせるものが確かに生きている。それもきわめて生々しく、奇跡的なまでにその本質をとどめて生きている。

同じキリスト教という母胎から、東西でどれほどかけ離れた神学や思想や様式が生まれたか、またど

れほど古くさく頑迷なものが存続しうるかということについて、わたしはなにやら戦慄に近いものをおぼえる。正教の国ロシアは、それをどれほど恥じてきたことか、そして一方で、それをどれほど誇らしく思っていることか。この矛盾した感情を理解しなければ、わたしたちはなにも理解できないし、それはまた非西洋たるわれわれ自身の感情にも近いものであることを、認識できるほどにわたしたちは自身自身を知っているか。自分の内側で、彼らに呼応するように、われらの古き神々がこのように叫ぶのを聞かないだろうか。

「おれたちを思い出せ、知っているだろう、おれたちの力がどれだけ強いかを。本気になれば、おれたちがどれだけやれるかを。隠され、不当に押しこめられていたおれたちの信奉者よ、いまこそ出てきて叫べ。ひと暴れと行こうじゃないか。この世界は息がつまる」

人はあんまり理知的に、賢くなりすぎると、本来自分がどれほどバカかということを忘れる。自分がどれほど原始的で、抜け作で、おっちょこちよいで粗雑なつくりをしているかを、つい忘れてしまう。でも人間は有限でありその能力にも限界がある。わたしたちはだから無限のものを夢見るのではないか。完全無欠の理想を夢見るのではないか。人間は正義ではない、善ではない、完璧ではない、無謬の存在

ではない。だからわたしたちはそれを夢見る、あるいはそれらの夢を寄せ集めた神を、超人を。だがそのとき、はるかな高みを仰ぐと同時にわたしたちの足元をしっかりと見つめるのを忘れてはいけない。そこには穴だらけ、疵だらけ、欠陥だらけのわたしたち自身が居心地悪そうにうずくまっているのだ。どうかどんなときにもそれを忘れないでいてほしいと思う。えらい人たちには特に。だってほんとうの話し合いは、相手への同情抜きにはじまらないし、相手への同情は、おのれの愚かさを理解しないでは生じようがないからだ。

わたしたちの義務は神になることではない。神のもとへ、この誤謬とばかばかしさに満ちたわたしたち自身を届けることだ、むき身のまま、なんの装飾もせず、ただそのままの姿で、神のもとへ向かうのだ。おまえはなにを学んだか？と神は訊くだろう。「あの地上で、あの下の世界で、おまえはなにを学んだか」

ある優等生はこう答えるだろう。「わたくしはしこたま学びました。アルファベットにはじまり、大学を出て、ロースクールに入り……ともかくよく勉強し、社会のため、正義のために尽くしたのです。社会を改革しようと努めたのです。わたくしは……」

「次！」
と神さまは云った。ひとりがおらずと前に進み

出た。

「おまえはなにを学んだか？」

「別になににも学びませんでした」

とその人は遠慮がちに云う。

「わたしは生き、感じました。わたしは見ました。ときどき思ったりもしました。たくさん不思議なものを見ました。でもその理由はよくわかりませんでした……」

神は微笑み、次の人を呼んだ。

後記に代えて

部屋がいくらか片づき、書き物机ができたので、ものを書く余裕が出てきた。喜ばしいことである。いまは二本の短編を抱えている。それを書きながら、今号はもっとやわらかく肩の凝らないものを書こうと思ったのにこんなことになってしまった。うまくいかないものである。

わたしがどうして正教会の人間になってしまったかは神のみぞ知るが、この件を通して、神はわたしに信仰の問題というよりこの世の問題を投げかけているように思う。わたしが東洋人であること、非西洋の人間であること、よりによって正教会を選んでしまったことは、このたびの戦争を通じて、わたし

に重くのしかかってきている。わたしは責任を感じているが、それは狭義のヨーロッパの歴史と文化とを経験しなかったすべての人たちが、等しく通らねばならず、等しく考えねばならぬものへの責任であるように思う。

引越し騒ぎのあいだに、皆さんに伝えようと思っていたいろいろなことを、こないだまで確かに覚えていたと思つたが、毎日春の雪解けのなかにいて、雪と一緒にわたしも溶けてしまったので忘れてしまった。テレビの気象情報によれば、このあたりの積雪はまだ二〇センチ残っているということである。二〇〇センチが二〇センチに減つたとはおそろしいが、我が家のまわりの雪は高く積み上げられているので、まだひと月も消えないで残っているだろうと思う。

このあいだはじめて知つたが、こんなに雪が降る地域に人間がまとまって住んでいるのは日本だけだそうである。積雪の多い都市ランキングの上位を日本が独占しており、自分がずいぶん珍しい場所を生を受けて育つたことだと改めて思った。人間はその人が生きる空間すなわち風土と切り離せないといつたのは和辻哲郎だが、こんな雪の多い場所に住む人と、南国に住む人とは、ずいぶんもの見方も感じ方も違うだろうし、第一身体が違うだろうと思つたことだった。

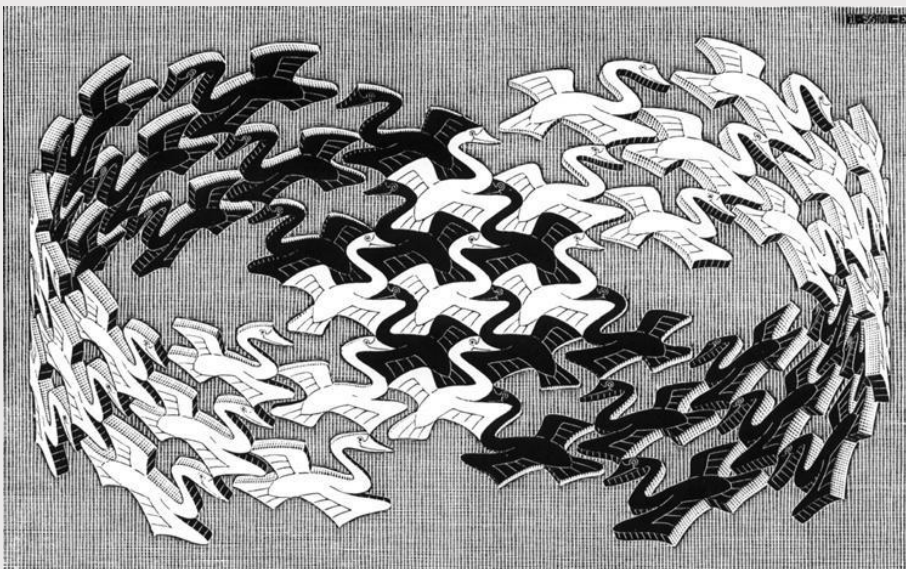
これもこないだはじめて知つたが、体脂肪率の測定は、身体の水分量にずいぶん左右されるそうである。わたしは膀胱が特大なのと、水分摂取量が多いのとでもそも水っぽいのだが、一年じゅう乾燥ということを知らない地域に生まれた人間が、どこもかしこも水っぽいのは当然のことであるし、これもまた身土不二という言葉を思わせるようだなにやら興味深いことだった。

こんなとりとめもないことを考えながら、月が変わってゆく。こないだ最後に残つた行き遅れの白鳥の一派が、雪の溶けたぬかるんだ田んぼで、泥まみれになって餌をとっているのを見た。それを見て、わたしは白鳥の美しさというものを、てんでとりちがえていたかもしれぬと思つたことだった。

二〇二二年四月一日

水澤絳雪

<https://mjibms.com/>



M. C. Escher : Swans